



Title	ドキュメンタリ映画「ひとりごとのように」をみて
Author(s)	井尻, 貴子
Citation	臨床哲学. 2008, 9, p. 173-177
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8400
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

<批評>

ドキュメンタリ映画「ひとりごとのように」をみて

井尻 貴子

大野一雄。〈舞踏の祖〉と呼ばれる故土方巽と共に、日本舞踏の草創期を形づくった舞踏家⁽¹⁾。

「ひとりごとのように」は、その大野一雄を追ったドキュメンタリ映画である（もちろん、映画作品である以上、監督の目線から大野が捉えられている。が、ここでは映画作品であることはひとまずおき、画中に現れる大野の身体に着目したいと思う）。1906年（明治39年）北海道、函館に生れた大野は、日本体育会体操学校（現日本体育大学）に在学中、スペイン舞踊、ラ・アルヘンチーナ（アントニア・メルセ）の公演に接し衝撃を受け、石井漠、江口隆哉、宮操子等にモダン・ダンスを学んだという。9年間の戦争を華北・ニューギニアでくぐり抜けた後、1949年、神田共立講堂で、大野一雄現代舞踊公演を挙行。以来、日本を代表する舞踏家として活動し続けてきた。

2001年、一雄の子息、大野慶人の舞踏をめぐる思索と Workshop から映画は始まる。ワーク・ショップでは一雄も踊る⁽²⁾。

しかし、それは、踊りとは言い難い動きであるように私には思えた。

2000年、大野一雄は腰を打ち、歩行不能におちいったという。そのせいか、動きはざこちない。椅子に座ったまま、手を動かす。音楽にあわせ、身体がゆれる。だが身体は、思いどおりになっているようには見えない。立ち上がろうとし、ままならず床に伏し、転がる。そして、なおも動く。

痛ましい。それが、冒頭のシーンで床に崩れ落ちた大野一雄に対する、私の正直な感想だった。

95歳の誕生日を祝う舞台公演の話がもちあがった。公演に向けてのリハーサルが進む。その頃、一雄に言葉の障害が起こりはじめる。(中略)何としても、もう一度自分の踊りを踊りたい、その欲求と生来の強靱な意思とが、一雄を回復に導く⁽³⁾。

だが、以前と同じようになることを目標とし、それを回復と呼ぶなら⁽⁴⁾。残酷かもしれないが、それは不可能だろう。稽古場へと続く、急な石段を、ひとりで登ることもできない。それでも、大野は稽古場へと足を運ぶ。稽古を見守り、加わり、身体を動かす、いや、動かそうとする。倒れそうなその身体をしばしば大野慶人に支えられながら。しかし、その支える手も、大野には枷のように感じられる時があったのかもしれない。稽古場で言語が不明瞭になっている大野一雄が「私は…踊りたい。踊らなくてもいいのか。踊りたいから、ここへ、山へ登ってきた。踊っちゃ悪いのか。おさえているというのは…踊れと。踊りたくはないのか。(後略)」⁽⁵⁾と訴えるシーンがある。

その言葉に、答える者はいない。老いた大野には「踊るな」という声が聞こえていたのか。それが幻なのか現実なのか、映画ではわからない。そのことが更に、老いがもたらした変化を強調し、回復とは遠いことをうかがわせる。

公演はいよいよ本番を迎える。

舞台を360度客席が取り囲む。舞台中央に置かれた1脚の椅子に、黒いスーツに白いシャツを身につけた大野が座っている。かつてのような白塗りは施されていない。その顔の皺からも、観客は老いを感知するだろう。

音楽が奏でられ、公演がはじまる。

私は、大野から目を離せないでいた。

公演は、じっと椅子に坐った不動の構えと空間を生き物のように舞い踊る上半身や手指の表情、静と動の対比の妙味の中で成功裡に終わった⁽⁶⁾。

確かに、公演後、スタンディングオベーションがおこり、拍手が鳴りやまなかった。しかし私は、その「成功」は「静と動の対比の妙味」によってもたらされたのでは、ないように感じた。老いた身体を批評することは難しい。それはともすれば、動かないことで

はなく、動けないことを批評することになりかねないからだ。身体的制御から生じる静と、かろうじて動かせる上半身と手指によってもたらされる動。そういった観点でその動きを捉えてしまえば、そのように書かざるをえないだろう。だが、少なくとも私には「静と動の対比の妙味」などというものを味わう余裕はなかった。

私が、大野から目を離せないでいた理由は、もっと違うところにあったように思う。身をのりだすように、見てしまう、その理由は、先の劇評にあったような「静と動の対比の妙味」に、思い切って言ってしまえば、その動きに魅せられたから、ではなかっただろう。

動き、ではなく、そこにある、大野の身体。その身体にひきつけられてしまっていた。その身体、95歳の身体、老いを見てとれる身体に。大野が、動こうとする。思わず、動けるのか、というひりひりした緊迫感を抱く。それはたとえば、年をとった母親の、包丁を持つ手を見るような心境かもしれない。手先がぶれる。指を切ってしまうかもしれない。見ていられない。そして大抵は、やめろ、と言ってしまう。あるいは、手助けしてしまう。行為を横取りしてしまう。そんな光景は、日常にありふれている。また大野が転んだら。今度は動けなくなるかもしれない。そう思う者もいだろう。

けれども、大野は舞台上にいる。私はやめろ、と言うことはできない。見ることしかできないのだ。

見えるものが私を満たし、私を占有しうるのは、それを見ている私が無の底からそれを見るのではなく、見えるもののただなかから見ているからであり、見る者としての私もまた見えるものだからにほかならない（メルロ＝ポンティ）⁷⁾。

このメルロ＝ポンティの言葉をうけ、劇団態変を主宰する金満里は「深く深く対象を見ることは、見る私と私が見る対象とが存在として重なり合っていくことだ」⁸⁾と述べる。

目が離せずにいるそのとき、私はもう、深く、大野の身体にまきこまれてしまっている。それは、大野の身体であるが、人間の身体でもあるという点で、私の身体でもあるだろう。

老いていく身体でもって舞台に立つ、そのとき、大野はどうするのか。私は、どうすることができるのか。

小林康夫は「老い」に関する論考のなかで、人は「老いていく体と、しかしそうした

時間的变化から超越している『自我』との根本的な差異を感覚し、苦しむと指摘する。そして「衰退し機能不全に陥る身体をみずからのものとして認め、同時に、時間によって変わることはないみずからの価値を信じ、その両者のあいだの苦しみに満ちた乖離を、しかし世界に開かれたみずからの存在の根源的条件として引き受けるとき、その乖離は青空のような光に満たされるかもしれない」と述べる⁽⁹⁾。

見られる者としての大野。そこで彼は、二重の「認め」を強要される。自らの老いを認めること。そして、自らの老いを見る者に認められることを認めること。仮に大野が、いまの身体を「衰退し機能不全に陥る身体」と認識していなくとも、見る者の目にはそう映るかもしれない。見る者のうちで、かつての大野といまの大野が比較されることから、大野が逃れることはできない。

他者によって、老いを認められ、それでも、なお、踊り手としての大野の価値を認められることが、舞踏家としての大野の存在条件となる。乖離は他者のうちにも存在する。

老いてゆく、機能不全に陥る、自らの身体に気づいたとき、人はどのような行動をとるのだろうか。認めたくない。動けない、ことに気づくのが、こわい、つらいという思いが生じるのではないだろうか。動けないことを意識せざるをえないような行動を避ける。少しずつ時間をかけ、その身体になじんでゆく。その身体で動くことのできる範囲を学び、その範囲内で動く、あるいは、動かない。

だが舞踏家大野に、その選択肢は、はじめからないかのように思える。動く。あくまでも。踊る。舞踏を生みだそうとする。動ける、動かないに関わらず、いま、動く、その身体をめいっぱい使って、さらにそれを超えてたところに動きが生まれるとき、大野の舞踏が生まれているように感じた。

そしてまた、見る者の視線は、自分に跳ね返る。認める、信じる、引き受ける。見る者にもまた、それらのことが、静かに、強要されている。

小林は先の論考を「老いは誰にとっても、究極のレッスンが得られる場にほかならない」⁽¹⁰⁾という言葉でしめくくっている。

歳を重ねた大野の身体。かつてのように、動けない身体。その身体を前にして、そ

の身体に対する大野の試みが、うまくいくように、願う。そこに、また自らが辿るだろう身体の行く末を重ね合わせながら。小林の指摘を待つまでもなく、老いから逃れられる人などいないことを、私たちは知っている。知らないふりをしているとしても。

だからこそ、動き出した大野の手指がひらひらと宙を舞うとき、私は息を呑むのではないだろうか。

大野がなおも、大野であろうとする。その姿に、息を呑むのではないだろうか。

踊り続けてきた大野は、なお踊り続ける。自らにとって、見る者にとって、大野一雄であり続けようとする、そしてそれこそが大野が、大野で、あり続けることへの唯一の方法でもあるのだと思う。

注

1 QUEST HP より。 <http://www.queststation.com/oono/>

2 同上

3 同上

4 広辞苑によれば「回復」とは、「一度失ったものをとりもどすこと。もとのとおりになること」とされている。

5 「ひとりごとのように」パンフレットより

6 QUEST HP より

7 M・メルロ＝ポンティ『見えるものと見えないもの』、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1989年、158頁

8 金満里「舞う身体、這う身体」、『身体をめぐるレッスン1』、岩波書店、169頁

9 小林康夫「老い」、『事典 哲学の木』、講談社、2002年、127-128頁

10 同上

